

◆年頭挨拶◆

病院長

松岡 哲也

(兼) 副理事長・
患者サポートセン
ター長



「謹んで新春のお慶びを
申し上げます。」

旧年中は、当院の運営に多大なるご支援を頂き、
ありがとうございます。

昨年は、コロナに始まりコロナで暮れた一年でし
た。当院は、特定感染症センターの指定医療機関で
あり、第一波において、得体の知れぬ新型コロナウイルス
に対し逸早くCOVID-19患者を受け入れ、重
症患者用に救命救急センターの集中治療病床(IC
U)18床のうち8床を急ごしらえの壁で仕切り、大
阪府全域から患者を受け入れました。COVID-19
患者の診療には、通常の2倍以上の医療スタッフを
必要とします。人員を急ぎ確保するために、止む無
く二次救急患者の受け入れを一部停止し、重篤な
三次救急患者だけに制限しました。その結果、皆さ
まにも少なからずご迷惑をおかけしたことと思いま
す。また、二次救急の制限に、紹介患者や手術件数
の減少の影響も加わって、医業収益が大幅に減少し
ました。このままでは、地域医療体制のみならず、当
院の運営も危機的状況に陥ることが危惧されていま
す。

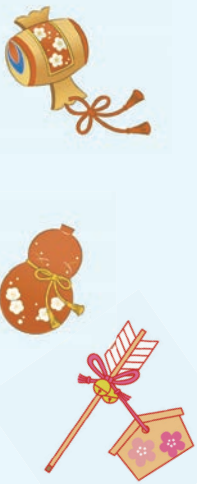
この経験を踏まえて、「ウィズコロナ」時代の医療
を実践すべく、第二波、第三波では、二次救急や手
術を制限せず、通常の診療機能を維持したままCO
VID-19(疑いを含む)の中等症、重症患者の診療
を提供しています。それでも、一病棟とHCU(高度
治療病床)をCOVID-19患者用に利用し、中等症

26床と重症4床、その後大阪府の要請により
救命救急センターICU3床を閉鎖して最重症
2床の病床を確保しています。病床の制限され
た中、残った病床を効率的に運用するために、
地域医療機関にもご協力を頂き在院日数の短
縮に努めて、当地域の医療ニーズにお応えすべ
く、病院の総力を挙げて診療に取り組んでいま
す。そのような環境下においても、医療スタッフ
は感染防御に細心の注意を払い、院内クラス
ターを発生させていません。

厚生労働省は、新型コロナウイルスワクチンの
早期認可に前向きな姿勢ですが、このワクチン
の有効性は未知数であり、このコロナ禍がいつま
で続くかは予測できません。医療体制の維持に
は、公的資金の投入は必須ですが、財源
には限りがあります。やはり、最終的にはこのコ
ロナ禍を、自助、共助で乗り切らざるを得ない
かもしれません。本年も、これまで同様、地域で
タッグを組んで、コロナ禍であっても住民の方々
に納得いただける医療を提供したいと思ってお
ります。

「アフターコロナ」の時代には、今回のような
新興感染症のパンデミックや、地震などの自然
災害といった非常事態に対応できる医療体制
の構築が不可欠です。そのためには、現在取り
組まれている「地域医療構想」の抜本的見直し
が必要でしょう。

新春の喜ばしい折に、明るい話題を見出すの
が難しい状況ではありますが、後ろ向きになる
ことなく、当院の診療体制を益々充実させて、
皆さまのご期待に応える所存ですので、引き続
きご支援のほどを宜しくお願いします。



◆年頭挨拶◆

事務局長

家宮 久雄

(兼) 経営戦略室長



さて、現在は新型
コロナウイルス感染
症に感染する患者の
方が、感染経路がわ
からないまま、感染
してしまうような状
況が増えてきていま
す。皆様方も感染予

新年あけましておめでとうございます
昨年一月から新型コロナウイルス
の発生に始まり、患者数の増減には
変化があったものの、一波、二波、三
波と大きな波を繰り返し、現在も
まだ、収束が見えない状況が続いて
おります。一波の時には、この地域
には感染者の方が少なかったもの
の、当院も感染症センターを有する
特定感染症指定医療機関の役割を果
たすため、大阪府内の重症患者の
治療に取り組むなど、対応をしてま
いりました。

その時は、二次救急患者の受入
れを一部制限させていただいたこと
もありますが、その後は、この地域
の一般患者の方の診療も通常通り
行いながら、新型コロナウイルス感
染症患者の方の診療も行うことが当
院の使命というところで、医師や看護
師をはじめとする医療スタッフは、全
員力を合わせ、一丸となって患者の
方々の治療に向かっております。

我々、事務職員も、検体採取の手
伝いをするなど、懸命に患者の方々
と向き合っている医療スタッフをサ
ポートしつつ、未知のウイルスと共に
戦っているところでございます。
結びに、新型コロナウイルス感染症
が一日でも早く、収束に向かうよう
に祈念いたします。それまで病院ス
タッフは力を合わせ頑張っているの
で、引き続き、ご理解、ご協力、ご
支援のほどよろしくお願い申し上げます。